

カナダ研究年報

The Annual Review of Canadian Studies
La revue annuelle d'études canadiennes

第 40 号

2 0 2 0

日本カナダ学会

The Japanese Association for Canadian Studies
L'Association japonaise d'études canadiennes

目 次

<論文>

- 20 世紀前半のカナダ平原諸州における沖縄県出身者の移住過程
..... 花 木 宏 直 1
- 19 世紀後半オンタリオ州立「精神遅滞」者施設の役割と実際
ー同州報告書の分析ー 下 司 優 里 18

<書評>

- 田林 明 編著『カナダにおける都市ー農村共生システム
ー農村空間の商品化と地域振興ー』（農林統計出版、2020 年）
..... 藤 田 直 晴 36
- ルース・アビィ 著、梅川佳子 訳『チャールズ・テイラーの思想』
（名古屋大学出版会、2019 年）..... 丹 羽 卓 41
- 長谷川瑞穂『先住・少数民族の言語保持と教育
ーカナダ・イヌイットの現実と未来』（明石書店、2019 年）..... 岸 上 伸 啓 46
- 和泉真澄『日系カナダ人の移動と運動ー知られざる
日本人の越境生活史ー』（小鳥遊書房、2020 年）..... 下 村 雄 紀 51
- 水戸考道・大石太郎・大岡栄美 編著『総合研究 カナダ』
（関西学院大学出版会、2020 年）..... 田 中 俊 弘 56
- ### <文献リスト>
- 日本におけるカナダ研究・カナダ関連の近著 61

19 世紀後半オンタリオ州立 「精神遅滞」者施設の役割と実際 —同州政府報告書の分析—

下司 優里

1. はじめに

本稿では、連邦結成後間もない 19 世紀後半から 20 世紀初頭までの時期において、カナダのなかでは精神遅滞者⁽¹⁾への対応に主導的立場にあったオンタリオ州を研究対象として、同州において、どのように精神遅滞者の処遇問題が認識され、またいかなる方法で彼らに対応しようとしたのかを明らかにする。そこで、1876 年の開設から 1950 年代まで州内で唯一の州立精神遅滞者施設であったオリリア (Orillia) 施設⁽²⁾を取り上げ、同施設が開設された意図や背景、および初期の実態を明らかにする。

ここで焦点を当てるオンタリオ州は、19 世紀後半以降、カナダの中核地域であっただけでなく、1876 年には国内初の州立白痴専門施設を開設し、20 世紀初頭には精神遅滞者調査官職を創設した。また 1914 年には他州に先駆けて精神遅滞児を含めた特別な児童を対象とする補助学級 (Auxiliary Classes) の設置を法定化するなど、精神遅滞者施策の創始と展開に先駆的役割を果たしてきた⁽³⁾。

それゆえ、同州における精神遅滞に関する問題意識とその政策的対応について明らかにすることは、精神遅滞の処遇がいかにして州の問題として成立し、どのような対応がなされたのかを解明するだけでなく、カナダ全体において精神遅滞者への社会的対応が変化する経緯と背景を明らかにするうえでもきわめて重要な意味をもつと考える。

オンタリオ州における精神遅滞者の福祉あるいは初期の教育に関しては、ジェラルド・ハケット (Gerald T. Hackett)⁽⁴⁾、ハーヴィー・シモンズ (Harvey G. Simmons)⁽⁵⁾、ジェニファー・スティーヴン (Jennifer A. Stephen)⁽⁶⁾、ヘンリー・エンス (Henry Enns) とアルドレッド・ノイフェルト (Aldred H. Neufeldt)⁽⁷⁾、およびジェサ・チュピック (Jessa Chupik) とデイヴィッド・ライト (David Wright)⁽⁸⁾ などによる先行研究がある。これ

らの研究は、一次資料に基づいて当時の精神遅滞者処遇の実態を示しているものの、とりわけ第二次世界大戦以前の時期については、研究の歴史的背景として通史的に記述されているのみであり、当時の英米からの影響を含め、なにゆえその対応がなされたのかについての検討が必ずしも十分とはいえない。

そこで本稿では、オンタリオ州政府施設調査官年次報告書 (Annual Report of the Inspector of Prison and Public Charities 以下、IPPC) およびそのなかに含まれるオリリア施設の年次報告書を主な一次資料とし、初期の慈善・矯正施設、病院、アサイラム等州立施設における入所者の処遇実態を把握するとともに、施設調査官の言説および各施設長の運営理念を検討する。

本稿の構成と内容は以下の通りである。

まず、19世紀後半のオンタリオ州において、精神病アサイラムや慈善・矯正施設における入所者の過密化と処遇に適さない精神遅滞者の問題が顕在化する経緯を明らかにする。次に、それら問題の解決策として構想されたオリリア施設の当初の目的と内容を整理する。そして、実際に開設された同施設が再び多様な入所者の混在と過密化、さらに財政難に直面し、施設長のもとで対応を模索する過程について、当時の施設年次報告書を中心に論じる。

2. 19世紀後半までの精神病アサイラムにおける精神遅滞者の混在

(1) 19世紀後半の精神病アサイラムと施設調査官職の設置

社会福祉の基盤が未発達であった20世紀初頭までのカナダでは、精神遅滞者のケアの主たる担い手は第一次産業に従事するコミュニティであり、拡大家族であった。その一方で、一部の精神遅滞者は精神病 (insane)、あるいは社会不適応と判断され、精神病アサイラムや慈善・矯正施設で措置されていた⁽⁹⁾。

カナダで最初の精神病アサイラムは、1835年に東部のニュー・ブランズウィック植民地セント・ジョン (St. John) に設置され、その後人口の増加に伴って各州に置かれるようになる。カナダにおける州立精神病アサイラムの設置拡大の背景には、人口の増加による需要の高まりのほか、アメリカ合衆国 (以下、アメリカ) の社会改革運動家であり貧困精神病患者のアサイラム設置運動を推進したドロシア・L・ディックス (Dorothea L. Dix, 1802-1887) によるカナダの沿海諸州への活動展開もあった⁽¹⁰⁾。

オンタリオ州だけみれば、連邦結成直後の1867年の時点で、州都であるトロントに加え、オリリア、マルデン (Malden) の計3箇所精神病アサイラムが存在しており、この3施設で人口約150万人の州全体を網羅していた。1868年10月1日当時の入所者

数はそれぞれ、トロント・アサイラムが 518 人、マルデン・アサイラムが 244 人、オリア・アサイラムが 117 人で計 879 人(人口比およそ 0.06%)であった⁽¹¹⁾。

他方、隣国アメリカに目を転じると、「白痴は教育可能である」との当時ヨーロッパからの情報を受けて、1850 年前後には精神病アサイラムと分離独立した教育機関としての「白痴学校」(training schools for idiots)が設置されていた。特にオンタリオ州と隣接するニューヨーク州では、州立ユティカ精神病アサイラムのアマリア・ブリガム (Amariah Brigham) 施設長を中心に全米で最も早い時期に精神遅滞者専門施設の設置が主張されており、州立「白痴学校」の創設は 1851 年とマサチューセッツ州(1848 年)に次いで早かった⁽¹²⁾。

同時期にイギリスにおいても、精神病院 (madhouse) で混合収容されていた精神遅滞者を分離、処遇するための施設が登場する。その初例は、1847 年のパーク・ハウス施設 (Park House Asylum、後のアールスウッド白痴施設 Royal Earlswood Asylum for Idiots) であり、1870 年までに白痴施設は計 5 箇所開設された⁽¹³⁾。ただし、そのうち年少児のための教育施設を備えていたのは 3 箇所のみであり、いずれの白痴施設も成人を入所させていたことから⁽¹⁴⁾、イギリスの初期白痴施設は、アメリカの「白痴学校」のように年少児の教育のみを目的としたものではなかった。

カナダにおいて、精神病アサイラム、そのほか救貧院や刑務所といった慈善・矯正施設とは別個のものとして精神遅滞者のみを対象とした最初の州立施設が開設されるのは、英米に遅れること約 30 年後の 1876 年であった。

オンタリオ州において、精神遅滞者を含む施設の処遇問題を初めて提起したのは、医師であり、オンタリオ州政府の初代アサイラム・刑務所・慈善施設調査官(以下、施設調査官)の職にあったジョン・ウッドバーン・ラングミュア (John Woodburn Langmuir, 1835?-1915) であった。

施設調査官は、市立および州立の刑務所、病院、慈善施設、救貧院、孤児院等を含め、公立と私立とに関わりなくほぼすべての施設への検閲と立入調査の権限を有しており、いわば精神的、身体的、法的、そして経済的に社会への適応に困難を抱える人々への対応責任者であった⁽¹⁵⁾。ただし、それら施設の財源と運営には差がみられた。精神病アサイラムは財源、運営ともに完全に州の管理下にあったのに対し、救貧院や病院は公金が投入されていたものの独自の運営が認められており、そして刑務所や留置場は施設局と裁判所とが管轄権を共有していた。

実は、連邦結成以前の 1866 年までのアッパー・カナダ植民地(後のオンタリオ州)では、同職を担う施設調査官は 5 人配置されていた。ところが「イギリス領北アメリカ法」(British North America Act)によりカナダ自治領が生成されると翌年に「刑務所およびアサイラム調査法」(Prison and Asylum Inspection Act, 1868)が制定された。施設調

査官とその職務についての法的枠組みを供した同法により、施設調査官職は1人へと減じられ、給与は従来の3分の1以下に減給される一方で、その負担は過重となっていた。それでも、1868年に着任したラングミュアは精力的に職務に取り組み、その働きぶりは「彼の執務室の仕事は一人ではとても荷が重すぎると思われたが、ラングミュア氏は、(重すぎるかどうかは)その一人がどんな人間かによる、ということを示した」(括弧内は筆者補足)と評されるほどであった⁽¹⁶⁾。

また「刑務所およびアサイラム調査法」の制定により、施設調査官の職務と権限は大きく拡大された。従来の州内施設の監督に加えて、それら施設の増設・改修について議会に提案する権限が与えられた。また、すべての施設について規則を策定するとともに、決算報告書と必要とされる州補助金の予算を提出する法的根拠が示された。さらに、州内施設の統計報告を作成すると同時に、自身が必要かつ便宜的と考える変更・改善を実行する職務が付与されたのである⁽¹⁷⁾。

(2) 施設調査官ラングミュアの活動と問題意識

スコットランドに生まれ育ったラングミュアは、10歳代半ばであった1849年にカナダへ移り住んだ。彼は移住先となったオンタリオ湖北東部のピクトン(Picton)に育ち、後に町議会議員と町長を歴任するなど行政の実績を積んではいたものの、彼にとって1868年に拝命する施設調査官の職務はまったく新しい挑戦であった。

ここで、ラングミュアが施設調査官在職中に主導して増開設が行われた主な州内施設を確認しておく。彼は1869年に州首相ジョン・サンドフィールド・マクドナルド(John Sandfield Macdonald, 1812-1872)とともにアメリカの聾院を訪れて得た知見をもとに、翌70年10月に寄宿制のオンタリオ州立聾啞教育施設(Ontario Institution for the Education for the Deaf and Dumb, Belleville)を開設した。さらに2年後の1872年5月には、寄宿制のオンタリオ州立盲教育施設(Ontario Institution for the Education for the Blind, Brantford)が開設されるが、これはカナダ教育界の重鎮で1871年オンタリオ州公立学校法成立の立役者であったエジャートン・ライアソン(Egerton Ryerson, 1803-1882)⁽¹⁸⁾の推奨に寄るところが大きかった⁽¹⁹⁾。

ふたたび1874年にアメリカの施設を視察したラングミュアは帰国後、処遇の厳格さで有名となるオンタリオ州中央刑務所(Ontario Central Prison)をトロントに開設し、州内の犯罪者収容能力の拡大を図った。彼による刑罰施設に関する主な実績のいまひとつは、1880年のオンタリオ州アンドリュー・マーサー女囚刑務所(Andrew Mercer Ontario Reformatory for Females, Toronto)の開設である。同刑務所は北米でも最初期の女囚刑務所のひとつであった。また彼は16歳未満の犯罪少年少女への対策にも乗り出

し、アンドリュー・マーサー女囚刑務所の敷地内に女子矯正施設 (Industrial Refuge for Girls) を、トロントから北へ約 150km のペンタングィッシュ (Penetanguishene) に男子少年院 (Ontario Reformatory for Boys) をいずれも 1880 年に開設した。

州内の施設数でみると、1868 年には精神病アサイラムが 3 箇所、病院が 6 箇所、刑務所は 37 箇所であったが、12 年後の 1880 年には、精神病アサイラム 4 箇所に加えて白痴施設 1 箇所、公金を受けている病院は 12 箇所、加えて聾啞教育施設 1 箇所、盲教育施設 1 箇所が開設されており、ラングミュアが短期間に施設の新設を進めていったことがわかる。そして、1880 年時点の刑務所数は記載がないものの、収容者数は州全体で 11,300 人と、1868 年時点の 5,655 人から倍以上に増加しており、収容能力の急激な拡大が行われたのが明らかである。

すなわち、初代施設調査官のラングミュアは連邦結成直後の時期にあつて、精神遅滞者のみならず、社会への適応に困難を抱える人々に対する収容施設の近代化と拡充を押し進めたのであった。

続いて、精神病アサイラムに関する彼の問題意識と対処に焦点を当てる。

ラングミュアは 1868 年に施設調査官に任命されると、州内にあるほぼすべての病院、アサイラム、刑務所、慈善施設、救貧院、保護施設などを対象として、詳細な実態調査を実施した。そして彼は、その年に提出した最初の IPPC において、「アサイラムの大規模化はすべての人々に注目されるべきである」と述べ、当時、入所需要を満たさなかった精神病者のための大規模施設を増設する必要性を強調した⁽²⁰⁾。

トロント・アサイラム施設長であった医師のジョセフ・ワークマン (Joseph Workman) もこの意見を支持し、現在の施設の 3 倍の収容能力が必要であることを述べた。マルデン・アサイラムの医師、ヘンリー・ランドール (Henry Landor) もまた、自身の施設の設備が陳腐かつ粗悪な状態にあることに加え、入所需要の 3 分の 1 しか受け入れられていない現状から、「ましてこのアサイラムにおいて適切な処遇 (proper treatment) を行うのは極めて困難であり、その本来の目的とは少しも合致していない」と述べ、その危機的状況を訴えていた⁽²¹⁾。

この IPPC が提出された直後に、キングストン (Kingston) とロンドン (London) に新たにアサイラムが開設された。その後、もともと大規模アサイラムとしての使用を想定していなかったオリリアとマルデンのアサイラム 2 箇所が 1870 年までに閉鎖されたために、連邦結成後のオンタリオ州における精神病アサイラムは、施設収容能力の深刻な不足にいつそう直面することとなる⁽²²⁾。

注目すべき点は、この 1868 年 IPPC において、トロント・アサイラム施設長のワークマンが「364 名の施設入所希望者の回状に目を通したところ、3 分の 1 がおそらく白痴である」と報告していることである⁽²³⁾。彼がこのとき何をもって白痴だと考えたのかは

明らかでないが、この指摘がなされたことは、1860年代において精神病アサイラムへの入所希望者のなかに重度級の精神遅滞者が含まれていることがすでに認識されていた事実を意味している。しかしながら、当時の施設局側の関心は、人数的に圧倒的多数であると考えられていた精神病患者に向けられていたから、残念ながら、こうした認識がただちに白痴者の分離処遇や類型化といった対策に結びつくことはなかった。

3. 慈善・矯正施設、家庭における精神遅滞者の不適合と白痴施設の構想

(1) 慈善・矯正施設と家庭に不適な存在としての精神遅滞者の顕在化

1870年代に入ると、アサイラム以外の多様な施設および家庭においても相当数の精神遅滞者が存在しているという報告が散見されるようになる。さらにラングミュアによって、精神遅滞者は適切なケアのもとで訓練または保護されることが望ましいが、現在置かれている環境は必ずしも彼らの気質に適しておらず、また適切な処遇ができる施設もないという実態が問題視されるようになっていく。

白痴・痴愚の人口について初めて公式に言及されたのは、1870年にラングミュアが提出した IPPC においてであった。彼は、1870年10月時点で、刑務所に再入所した56人の精神病患者のうち、少なくとも35人が白痴または痴愚であったことを報告した。さらに、数字の具体的根拠は不明であるものの、彼は「総計で、この種類(白痴または痴愚)の者は州内に300人以上いる」(括弧内は筆者補足)と考えていた⁽²⁴⁾。

先述したが、当時、精神遅滞者のケアの主たる担い手はコミュニティであり、拡大家族であった一方、一部の精神遅滞者は精神病アサイラムや慈善・矯正施設で措置されていた。ラングミュアはこれら精神遅滞者の置かれていた場についても彼らにとっては適切でない」と指摘している。犯罪者として刑務所に入所・再入所する精神遅滞者がいる一方で、同様の犯罪気質がありながら、2人の医師による精神病の診断書を必要とする精神病アサイラムへの入所要件を満たせず、自宅に置かれている白痴・痴愚者の「悲惨な事例が多くある」ことを問題視している。また、「その気質や習癖によって刑務所にいるべき人々はあるけれども、これら不幸な人々(白痴または痴愚の者)にとって、そこは適切な居場所とはいえない」(括弧内は筆者補足)と述べた。さらに英米の救貧院に関する報告書によれば、救貧院において監禁状態にある精神遅滞者の状況は「決して満足とはいえない」ことから、「救貧院において彼らの症状が大幅に改善するかは大変疑わしい」と強く批判している⁽²⁵⁾。

すなわち彼は1870年時点で刑務所は白痴者に適さず、救貧院さえも「疑わしい」と述べており⁽²⁶⁾、さらに同1878年の IPPC でも「多くの精神遅滞者を含む精神病患者の処遇は、

『非常に粗悪』であり『入所者の病気の種類とニーズにまったく不適合』であると報告している⁽²⁷⁾。

白痴・痴患者に対する刑務所や慈善施設でのこうした不適合は、これらの施設が元来、精神遅滞者の処遇を目的としていたわけではなかったことに加えて、当時のカナダにおいては、①障害の種類と程度、②成人と子ども、そして③性別による異なった処遇の必要性が十分に認識されていなかったことも重要な原因であったと考えられる⁽²⁸⁾。

(2) 保護・教育機関としての白痴施設の構想

それでは、ラングミュアは精神遅滞者にとってどのような処遇環境が望ましいと考えていたのであろうか。彼は1870年のIPPCにおいて、英米ですでに1840年代から50年代にかけて成立していた初期白痴学校に言及し、その成果として、両国が「白痴は教育により改善可能である」と指摘した事実に着目する⁽²⁹⁾。

実際には、英米の初期白痴学校におけるこうした「白痴教育・自活可能論」は、当初の期待とは異なり、1860年代にはすでに挫折しており、英米両国の白痴学校は事実上、教育から保護収容施設へと方針の変更を余儀なくされていた。その理由は、教育・訓練後にコミュニティで自活できるようになった者はごく一部であったという教育の非効率の検証と、年齢や精神遅滞の程度に制限なく入学を許可すべきであるとする親および社会の要求へ対応してきたことにあった。

しかし、こうした英米の方針転換にもかかわらずラングミュアは、20年以上前の両国の指摘を根拠として、1870年に、オンタリオ州に70～100人いると思われる、5～21歳の特別な教育により改善可能な白痴児に保護と訓練を提供するべきであると主張した。そのために一度閉鎖されたマルデンまたはオリリアの施設を再開するか、トロント・アサイラムまたは同年新たに開設されたロンドン・アサイラムに分館を設けることを提案している。

彼は英米における白痴学校の挫折を知っていたのか、そして知っていたとしたらそのうえでなぜオンタリオ州で白痴教育施設の設置を推し進めたのかを明らかにしていないが、翌71年のIPPCのなかで、白痴・痴愚児の訓練施設の必要性について次のように述べている。

白痴と痴愚の子どものための近代的な訓練施設(a modern training school) —その設置は、人道と公共経済、両方のために必要である。人道の面では、人生のすべての不安と懸念のなかで、白痴児の世話をしているこの州の何人もの母親の不安と懸念に匹敵するほどのものはほとんどないからである。公共経済の面では、多くの場合、こ

これらの子どもたちが家族のなかにいられるよう教わり準備するような訓練施設に入らなかったとしたら、彼らの多くは成人白痴施設の入所者として恒久的に州の負担となるだろうからである⁽³⁰⁾。

こうしたラングミュアの要請を受けて、翌 71 年にロンドン・アサイラムに白痴児のための分館の建設が開始され、1873 年に最大収容数に相当する 28 人の入所者ととも運営が開始された。しかし彼は、「これは急場しのぎの策であり、白痴の教育には不十分である」として、更なる専門施設の新設を主張し続ける。確かに、同アサイラム分館の入所者は、1874 年には 48 人、翌年には「清掃もできないほど」まで急増していたから、より大規模な専門施設の設置は急務であった⁽³¹⁾。

開所後 3 箇月にわたり定員を超過し、さらに増え続ける入所待機者を目の当たりにして、ラングミュアは白痴者のみを対象とした専門施設の開設が急務であることを再認識する。そのうえで彼は、1873 年の IPPC において白痴・痴愚の訓練施設の構想を記している。すなわち、イギリスをはじめとする欧州およびアメリカで現在運営されている白痴・痴愚児施設の報告によれば、「それらの施設で訓練と指導を受けた子どものうち 5 割以上が家庭に適応し、有用で、自ら生計を立てており、むしろそうでなければ彼らは不道德で卑しく公共の負担となっていたらう」ことを根拠とし⁽³²⁾、訓練施設の設置が有効かつ必要であるとした。

また現在のオンタリオ州立施設に収容されている白痴・痴愚者のうち「4 分の 1 は教育可能な年齢であるが、成年の白痴者と一緒に収容されているは悪癖が助長され、すぐに指導不可能になってしまう。そのため、訓練施設は教育のみを目的 (educational purpose) とし、指導を受ける能力がないとわかった者はすぐにアサイラムへ移されるべきである」と、対象者において 15 歳未満の子どもと成人とを明確に区別している⁽³³⁾。

こうして、白痴者の収容と白痴児に対する教育的対応を目的として 1876 年に開設されたのが、州立のオリリア白痴施設であった。同施設は、1898 年にブリティッシュ・コロンビア州立ウッドランド施設が開設されるまで、カナダで唯一の州立精神遅滞者専門施設であった⁽³⁴⁾。カナダ各地で同様の施設が開設されるのは 20 世紀以降の人口増加に伴ってであったから、オンタリオ州は、まさにその先例を作ったといえる。

4. 州立オリリア白痴施設の開設と初期の実態

(1) オリリア施設の開設と施設長ビートン

オリリア施設の前身となるオリリア・アサイラムは、トロントの北にあるシムコー (Simcoe) 湖畔の8エーカーの土地に、トロント・アサイラムの分館として1861年に開設されたが、9年後の1870年にいったん閉鎖された。そして1876年に150人の白痴者を収容保護する国内初の州立精神遅滞者専門施設として再開されたのである。

1876年8月1日に医師のジェームス・マクラレン・ウォレス (James McLaren Wallace) が施設長に就任するが、彼は着任に先立ってアメリカ4州の白痴施設を計5箇所、視察していた⁽³⁵⁾。

9月25日にはロンドン・アサイラム分館にいた35人が転入し、その後、刑務所や家庭にいた緊急保護事例の者が次々に入所し、11月時点で定員150人に対し入所者は合計103人と報告されている。103人のうち15歳未満の子どもは26人とおよそ4分の1であった。

オリリア施設開設直後の施設内での具体的な処遇内容や生活の様子についてはIPPCに記述がなく明らかでないが、職員は医師の施設長を筆頭に、事務員、エンジニア、庭師、裁縫師、宿直、世話人等であり、職員の職種、人数において他の精神病アサイラムと大きな相違はなかったようである。世話人は男女各5人が配置されているが、彼らが子どもの入所者の訓練、指導に実際にどこまで関わったのかは不明である⁽³⁶⁾。

しかしラングミュアは、組織と職員はアサイラムと訓練施設の両方の業務を十分に遂行できる体制にあり、望むべくはただひとつ、教育対象となる15歳未満の子どもと成人とを分離するための新しい建物の増設であると強く主張している⁽³⁷⁾。

さらに、開設翌年の1877年には、初代施設長ウォレスがハミルトン・アサイラムへ異動するが、彼の後任は、おそらく訓練施設としての機能の強化を意図して選ばれたと考えられる。というのも、同年に全米精神遅滞者施設長協会 (Association of Medical Officers of American Institutions for Idiotic and Feeble-Minded Persons 以下、AMOAI)⁽³⁸⁾のカナダ人初の会員となり⁽³⁹⁾、後に同協会の会長職を務めるアレクサンダー・ヘクトル・ビートン医師 (Alexander Hector Beaton, 1838-1932) が、2代目オリリア施設長として就任したからである。彼はのちの1888年にオリリア施設内学級を設置し、そこにおけるエデュアル・オネシモ・セガン (Edouard Onesimus Seguin, 1812-1880) の感覚訓練⁽⁴⁰⁾の導入、およびカナダで最初の幼稚園教育の導入などを実現した人物である。

外科医であったビートンがオリリア施設長に任命された経緯は今のところわかっていないものの、1876年に結成されたAMOAIへの加入・参加や1882年に退任するラング

ミアの意思を継いで施設内学級の開設に奔走していることは、同職に対する彼の熱意と行動力を明示しているといえよう。

(2) 入所者の多様な実態と施設の過密化

実際のオリリア施設は、開設当初の目的とビートンの意図に反して、白痴だけでなく、てんかんや肢体不自由、聾啞、そして職業訓練や若干の教科教育が可能な軽度級の入所者を受け入れることとなり⁽⁴¹⁾、多様な入所需要に応えなければならない状況に陥っていくのであった。たとえば、1881年のIPPCでは、オリリア施設入所者の内訳は、重度の肢体不自由15人、てんかん31人、精神病21人、聾啞43人、最重度級の先天性白痴が45人、そして作業能力のある者77人と報告されている⁽⁴²⁾。

すなわち、皮肉なことであるが、オリリア施設設置以前の非専門施設において深刻化していた、入所者の多様な実態とそれによって生じた処遇問題は、こうした問題の解決が設立の目的であったはずのオリリア施設においても、ふたたび時期と段階を変えて繰り返されることとなったのである。

その理由の一つは、白痴、痴愚を含む精神遅滞者の法的な診断および分類基準の未確立にあった。オンタリオ州において精神遅滞者を分類するための法的根拠として採用されたのは、イギリスにおいて1900年代以降に議論が始まり1913年に成立をみる「精神欠陥法」(Mental Deficiency Act of 1913)であったからである⁽⁴³⁾。

分類と処遇方法の未発達を示すように、ビートンは1881年のIPPCでスコットランドのラーバート施設長、W・W・アイルランド医師(W. W. Ireland)の言を引用して次のように述べている。「白痴には3種類ある。どんな指示も受け入れることができない(中略)教育不可能な白痴、(中略)白痴学校を必要とする教育可能な白痴、そして大人の白痴である。最初の2種類は同じ建物で世話できるが、3つめの白痴は別の建物で処遇したほうがよいだろう」⁽⁴⁴⁾。

すなわち、明確な法的根拠と基準なしに、家族、医師、あるいは裁判所の判断により精神遅滞と見なされた者がオリリア施設に措置されており、そのなかには必ずしもそこでの処遇が適切でない者も含まれていたのである。

オリリア施設の入所者にみられる多様な実態は、障害の種類や程度だけでなく、年齢構成にも及んだ。同施設における入所者の年齢構成はIPPCに記載がないものの、IPPC内で報告された死亡者の年齢をみると、1890年9月までの1年間の死亡者22人(男性10人、女性12人)のうち、15歳未満が5人、15～25歳が6人、25～35歳が3人、35～45歳が2人、45～55歳3人が、55歳以上が3人であり、死亡者の最低年齢は9歳、最高は63歳であった。このように同施設には、年少の子どもや若年者の状態改善を目的

とした訓練施設という当初の意図とは裏腹に、幅広い年齢層の入所者が存在していたのである⁽⁴⁵⁾。

なお、そのほか入所者の属性については、結婚歴、宗教、出生地 (nationalities、1908 年からは nativity)、出身地域の情報がみられる年度がある。たとえば 1877 年までの総計 166 人の入所者の出生地は、カナダが 49 人、次いでアイルランド 38 人、イングランド 20 人、スコットランド 16 人、そのほか 15 人、不明 28 人となっている⁽⁴⁶⁾。当時、オンタリオ州全体の人口でもカナダ出生の者は決して大多数ではなく、イギリスからの移民が多かったことに鑑みれば、出生地構成でのオリリア施設としての特徴は見られない。また州内の出身地域についても、比較的人口の多いトロントを要するヨーク地域が抜きん出ているほかは、オリリア施設のあるシムコー郡、そしてウェントワース郡 (Wentworth) やフロンテナック郡 (Frontenac) といったアメリカ側の湖畔地域からの入所者が比較的多いものの、ほぼ州全土に分散している⁽⁴⁷⁾。

障害の種類と程度、そして年齢の多様な入所需要に加えて入所者の多様な実態に加えて、オリリア施設は過密の問題にも直面する。1876 年の開設時には 140 人であった入所者は、ほぼ毎年増加し続け、20 世紀最初の年には 659 人にまで増加した。しかも、入所を希望する待機者数は 1891 年には 68 人であったが、5 年後の 1896 年にはその 2 倍以上に相当する 139 人、さらに 1901 年には 465 人にまで膨れあがった⁽⁴⁸⁾。

こうしたオリリア施設の飽和状態を緩和するために、1882 年初頭にラングミュアの後任となったウィリアム・T・オレイリー (William T. O' Reilly) は着任早々、当時の同施設入所者 234 人中 79 人をハミルトンのアサイラムへ移動させたが、これら送り出された入所者は同年 9 月にはオリリア施設に戻ってくる結果となった。当然ながら、オリリア施設の 3 倍以上の 900 人にのぼる入所者を抱えていたハミルトン・アサイラムにおいても、同様に過密と財政の問題を抱えており、約 80 人もの白痴者を受け入れる余裕はなかったものと思われる。そのため、オリリア施設では自身の施設設備の拡大を迫られることとなる。

1885 年に同じくシムコー湖畔の 105 エーカーの土地を購入し、追加で 200 人の入所者を想定した設備と本部棟が 1887 年に完成した。

しかし、新たな土地の購入によっても、同施設の過密は根本的には解決せず、ベッド数の不足を補うため、年少の子どもは一つのベッドを 2 人で共有しなければならないほどであった⁽⁴⁹⁾。

(3) 財政難と入所者の「雇用」

財政難もまた、深刻な課題であった。オリリア施設では、1894 - 95 年度以降は定員

を超過する数の入所者を受け入れていたにもかかわらず、州からは入所者数の増加に対応した予算措置は行われず、入所者1人当たりの費用は1876年開設時の202.07ドルから、1886年には124.57ドル、1901年には92.66ドルと入所者数の増加に反比例して縮小を余儀なくされている(表1)。

表1 州立オリリア施設における入所者数と1人当たりの費用の変化

| 年度 | 1876 | 1881 | 1886 | 1891 | 1896 | 1901 |
|------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| ベッド数 | 150 | — | — | 550 | 614 | 652 |
| 入所者数 | 140 | 234 | 210 | 486 | 641 | 659 |
| 入所待機者数 | — | — | — | 68 | 139 | 465 |
| 州による経費(\$) | 25,258 | 20,767 | 26,538 | 53,169 | 61,925 | 60,788 |
| 1人当費用(\$) | 202.07 | 119.42 | 124.57 | 118.15 | 97.37 | 92.66 |

注(50)をもとに筆者作成。—は不明。

当時の州立施設には、自費負担の入所者(paying patients)が一定数含まれており、彼らの納める生活費が施設の歳入となっていた。自費負担入所者の負担額は一定でなく、1877年には全施設で323人の該当者がおり、それぞれ1週間当たり1ドルから7ドルを納めていた。オリリア施設では1876年度は該当者なし、1877年には13人から787.00ドルの納金があり、1901年には63人から4,022.12ドルを得ていたが、必ずしも必要十分ではなかった⁽⁵¹⁾。

こうした財政的苦境に対する緩和策として、施設長ビートンは、入所者を「雇用」して施設内の農作業や家事といった仕事に従事させることで、経費の削減を図った。

入所者の雇用に関する記録は1878-79年度のIPPCにおいて初めて登場する。入所者全体において、入所の「職員」(employed patients)が占める割合は年とともに拡大し、1886-87年度には、入所者210人中96人が、1896-97年度には641人中303人が、さらに1906-07年度には761人中521人が施設内の仕事に従事していた(表2)。彼らに与えられた仕事は、男性は敷地の清掃、排水設備工事、植樹であり、女性は洗濯や裁縫であった⁽⁵³⁾。

表2 オリリア施設入所者、入所の「職員」、および職員数

| 年度 | 1876-77 | 1881-82 | 1886-87 | 1891-92 | 1896-97 | 1901-02 | 1906-07 |
|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 入所者 | 140 | 234 | 210 | 486 | 641 | 659 | 761 |
| うち入所「職員」 | — | 55 | 96 | 208 | 303 | 436 | 521 |
| 職員 | — | 29 | 38 | 56 | 70 | 70 | 73 |

注(52)をもとに筆者作成。—は不明。

オリリア施設における入所者の「雇用」が、入所者の増加に伴う職員の不足を補うためであったのか、むしろ、職員の人数を抑制することで、人件費を削減する意図があったのか、あるいは入所者へ仕事を与えることで訓練・教育する意図があったのかは明らかでない。しかし実際に同施設では、同程度の規模あるいはオリリア施設よりも小規模の精神病アサイラムと比べて、職員の人数が少数に抑えられていた。

たとえば、1895 - 96 年度にはオリリア施設は入所者数 630 人に対して職員の人数は 67 人(職員 1 人当たりの入所者数は 9.4 人)であったのに対して、オリリア施設より入所者の少ないキングストン・アサイラムでは入所者 556 人に対して職員が 78 人(同 7.1 人)であり、同様にハミルトン・アサイラムでは入所者 598 人に対して職員が 83 人(同 7.2 人)であったことから、キングストン、ミルトンの両施設に比べて、オリリア施設がその規模に照らしていかに少ない職員数で運営されていたかがわかる⁽⁵⁴⁾。

5. まとめと今後の課題

ここまで、19 世紀後半から 20 世紀初頭のオンタリオ州において、精神病アサイラム、慈善・矯正施設における入所者の過密化、および本来の入所対象ではない精神遅滞者の不適切な処遇といった問題の顕在化を受けて、州立オリリア施設が開設される経緯と初期の実態について論じてきた。

1867 年連邦結成直後のカナダでは、社会福祉基盤は未発達であった。オンタリオ州では、精神遅滞者の救済は第一次産業に従事するコミュニティに任されていた一方、一部の者は州内に 3 箇所開設されていた精神病アサイラムを筆頭に、あるいは刑務所、救貧院といった慈善・矯正施設へ収容されていた。

英米では 1840 年代に初例をみる白痴施設がカナダに開設されたのは、30 年ほど遅れた 1876 年のことであった。当時の州政府の施設調査官であったラングミュアは、州内の病院、アサイラム、慈善・矯正施設の拡充と近代化を図るなかでこれら施設に不適切な白痴への対応を迫られることとなる。

施設の過密化と過剰な入所需要にあえぐアサイラム施設長らの支持も得て、彼が白痴を対象とした施設の開設を進める根拠としたのは、欧米の白痴教育・自活可能論であった。ところが、実際に開設されたオリリア施設には、年少者の状態改善を目的とした訓練施設という当初の意図とは裏腹に、幅広い年齢層、そして障害の種類と程度において多様な入所者が存在することとなった。1913 年のイギリス精神欠陥法の成立まで、白痴、痴愚を含む精神遅滞者の法的な診断および分類基準が未確立であったし、広大なオンタリオ州において唯一の施設であったから、精神病アサイラムの入所要件を満たせない障害

者が殺到したものと推測される。

このように、19世紀末までの州立精神病アサイラムや慈善・矯正施設においては精神遅滞のある入所者に対する適切な処遇場所の欠如が指摘されており、さらにその解決が目的であったはずのオリリア施設においても多様な入所需要、過密化と財政難といった問題が喫緊の課題として認識と対応がなされていたことが明らかとなった。

最後に、今後の課題として2点あげたい。第一に、第一次世界大戦前の精神遅滞者の処遇についてである。州施設局やオリリア施設をはじめ、カナダにおける精神遅滞に関する史料は、英米のそれに比べて種類と記述に乏しく、施設内での生活の様子や詳細な訓練内容など実態をつかむことは困難であった。このことから、本稿では処遇内容については限られた記述にとどまっている。今後は一次資料だけでなく、カナダの関係者が視察先とした英米をはじめとする同時代の他国の史料収集にも努め、分析と考察を深める必要がある。

第二に、本稿では主として州立オリリア施設に焦点をあてて検討してきたが、そのほか救貧院やセツルメントといった福祉施設、私立施設、そして教会等コミュニティにおける精神遅滞者への対応についても今後さらに資料収集を行い、一層の分析を加えたい。

注

- (1) 本研究は歴史研究であり、用語は当時の表現を用いることを原則とする。また、当時のオンタリオ州議会が依拠していたイギリスの定義に従い、「精神遅滞」(amements)を総称とし、最重度級の「白痴」(idiots)、より軽度の「痴愚」(imbeciles)、そして最も軽度級の「精神薄弱」(feeble-minded)として区別して用いる。なお、本邦で歴史学の視点から精神障害者の処遇を扱った先行研究として、細川道久『「白人」支配のカナダ史：移民・先住民・優生学』(彩流社、2012年)がある。
- (2) 開設当初の施設名称は「オリリア白痴アサイラム」(Orillia Asylum for Idiots)であり、1908年には「オリリア白痴院」(Hospital for Idiots at Orillia)、さらに1911年には「オリリア精神薄弱者施設」(Hospital for Feeble-Minded at Orillia)へと改称している。Legislative Assembly of Ontario, *Annual Report of the Inspector of Prisons and Public Charities* (以下 *IPPC*), 1890-1919 (Toronto: 1891-1920)。
- (3) Theresa R. Richardson, *The Century of the Child: The Mental Hygiene Movement and Social Policy in the United States and Canada* (Albany, New York: State University of New York Press, 1989), 64-65; Margret A. Winzer, “History of Special Education,” in Margret A. Winzer, Sally Muriel Rogow, & Charlotte G. David, eds., *Exceptional Children in Canada* (Scarborough, Ontario: Prentice-Hall Canada, 1987), 83, 89.
- (4) Gerald T. Hackett, “The History of Public Education for Mentally Retarded Children in the Province of Ontario, 1867-1964,” EdD. Dissertation, University of Toronto, 1969.
- (5) Harvey G. Simmons, *From Asylum to Welfare* (Downsview, Ontario: National

- Institute on Mental Retardation, 1982).
- (6) Jennifer A. Stephen, "Mental Hygiene, Mental Defect and Mental Age: The "Feebleminded Women" and the Work of the Toronto Psychiatric Clinic," MA Dissertation, University of Toronto, 1995.
 - (7) Henry Enns & Aldred H. Neufeldt, eds., *In Pursuit of Equal Participation: Canada and Disability at Home and Abroad* (Concord, Ontario: Captus Press, 2003).
 - (8) Jessa Chupik & David Wright, "Treating the 'idiot' child in early 20th century Ontario," *Disability and Society*, 21(1) (August 2006), 77-90.
 - (9) Winzer, "History of special education," 82.
 - (10) Enns & Neufeldt, *In Pursuit of Equal Participation*, 28; Richardson, *The Century of the Child*, 12.
 - (11) *IPPC*, 1868, 21.
 - (12) Simmons, *From Asylum to Welfare*, 15-17.
 - (13) David G. Pritchard, *Education and the Handicapped: 1760-1960* (London: Routledge & Kegan Paul, 1963), 54-57.
 - (14) *Ibid.*, 57.
 - (15) Hackett, "The History of Public Education," 29-30.
 - (16) Peter Oliver, "Langmuir, John Woodburn," *Dictionary of Canadian Biography*, 14 (1998), 15 April 2020 <http://www.biographi.ca/en/bio/langmuir_john_woodburn_14E.html>.
 - (17) *Ibid.*
 - (18) ライアソンについては次の文献頁を参照。F.H. ジョンソン著、鹿毛基生訳『カナダ教育史』学文社、1984年、44 - 51頁。
 - (19) Gayle M. Comeau-Vasilopoulos, "Hunter, John Howard," *Dictionary of Canadian Biography*, 13 (1994), 15 April 2020 <http://www.biographi.ca/en/bio/hunter_john_howard_13E.html>.
 - (20) *IPPC*, 1868, 18.
 - (21) *Ibid.*, 39.
 - (22) Hackett, "The History of Public Education," 30.
 - (23) *Ibid.*
 - (24) *IPPC*, 1870, 38.
 - (25) *Ibid.*
 - (26) Hackett, "The History of Public Education," 31.
 - (27) Winzer, "History of Special Education," 82.
 - (28) Richardson, *The Century of the Child*, 12; Winzer, "History of Special Education," 85.
 - (29) Hackett, "The History of Public Education," 31.
 - (30) *IPPC*, 1871, 104.
 - (31) Hackett, "The History of Public Education," 32; *IPPC*, 1875, 223.
 - (32) *IPPC*, 1873, 17.
 - (33) *Ibid.*
 - (34) Winzer, "History of Special Education," 83.
 - (35) *IPPC*, 1877, 38, 261-262.

- (36) Ibid., 48-49.
- (37) Hackett, “The History of Public Education,” 34-35; *IPPC*, 1877, 39.
- (38) 初代会長はセガンであり、アメリカ知的・発達障害学会 (American Association on Intellectual and Developmental Disabilities) の前身。
- (39) American Association on Mental Deficiency, *Proceedings of AMOAI, Sessions: 1887-1895* (New York: Johnson Reprint Corporation, 1964), 253.
- (40) 感覚訓練は、知性の活発化と身体運動発達を統合しようとする方法である。セガンは特に精神遅滞児に対する生理学的教育実践やその理論についての研究を発表し、近代精神遅滞児教育の確立者として位置づけられる。19世紀後半当時、セガンの実践や理論についてオンタリオ州で言及された資料はみつからない。Hackett, “The History of Public Education,” 8, 45-46. しかし、同州の精神遅滞関係者が彼の実績についての情報を得ていたことは、次の事実から推察できる。まず、施設調査官オレイリーは、セガンの実践に感銘を受けて白痴学校を開設したハーベイ・バックス・ウィルバー (Hervey Backs Wilbur) のニューヨーク州立施設を1883年に訪問していること (*IPPC*, 1884, 19-21)、そしてセガンが初代会長在任中のAMOAIにピートンも加入しており、1877年、79年、80年の年次会議では、セガン、ウィルバーと列席していたことである。American Association on Mental Deficiency, *Proceedings of AMOAI, Sessions: 1876-1886* (New York: Johnson Reprint Corporation, 1964), 6, 43, 113.
- (41) *IPPC*, 1891, 149-153; 1892, 141-144; 1893, 142-145; 1894, 159-164; 1895, 169-175; 1896, 213-218; 1897a, 255-258; 1897b, 237-241; 1898, 255-260; 1899, 201-202; 1901, 157-159; 1902, 146-148; 1903, 163-166; 1904a, 163-165; 1904b, 194-197; 1906, 133-138; 1907, 135-137; 1908, 190-193; 1909, 21-23; 1910, 27-35.
- (42) Hackett, “The History of Public Education,” 49; *IPPC*, 1882, 417.
- (43) Hackett, “The History of Public Education,” 48-49.
- (44) *IPPC*, 1881, 370.
- (45) *IPPC*, 1891, 54.
- (46) *IPPC*, 1878, 324.
- (47) Ibid., 324-325.
- (48) Archives of Ontario, *Huronian Regional Centre (Orillia Asylum) Annual Statistics*, RG 29-24-1-4, 1876-1970.
- (49) *IPPC*, 1891, 149.
- (50) *Huronian Regional Centre, Annual Statistics*, 1876-1970.
- (51) *IPPC*, 1878, 15; 1902, xlvii.
- (52) *Huronian Regional Centre, Annual Statistics*, 1876-1970.
- (53) *IPPC*, 1891, 152.
- (54) *IPPC*, 1897.

(げしゆり 流通経済大学)

The Role and Reality of the Orillia Asylum for Idiots in the Late 19th Century Ontario

Yuri Geshi

From the second half of the 19th century through the beginning of the 20th century, the province of Ontario took a leading role in the treatment of the intellectually disabled. This paper focuses on this region, clarifying how the problem of treating the intellectually disabled was understood in this province, and what kinds of goals and methodology guided the approach. In particular, focus will be placed on the case of the Orillia Asylum for Idiots, which was the only provincial institution for the intellectually disabled from its establishment in 1876 until the 1950s. The author will outline the circumstances and intentions that surrounded its establishment, and illuminate its status in its early days.

In late 19th century Ontario, the intellectually disabled were mostly taken care of by communities engaged in primary industries. Some individuals were sent to prisons, public charities, including workhouses, or asylums for the insane, which were established in three locations across the province. It was not until 1876 that Canada finally established its initial “institutions for idiots” –more than 30 years after Britain and the United States (in the 1840s). The first Inspector of Asylums, Prisons and Public Charities in Ontario, John W. Langmuir, sought to expand and modernize the province’s hospitals, asylums, and charitable and correctional institutions. It is in this context that he discovered that these facilities were unnecessarily housing a class of individuals with severe intellectual disabilities, referred to as “idiots.” Gaining support for his views from the heads of the various asylums and facilities of Ontario, who were struggling with overcrowding and excessive demand for admission, Langmuir planned to develop a facility dedicated to the treatment of these individuals. Giving theoretical justifications, he introduced new ideas emerged in Europe and the United States, where specialists were arguing that it was possible to educate “idiots” to foster their independence.

With this background, the Orillia Asylum for Idiots was established in 1876 on the shore of Lake Simcoe to educate and train “idiots.” However, contrary to its original goal, and the wishes of the first superintendent of the institution, the asylum had to admit “idiots” and several other categories, including people with

epilepsy, people with disabilities, and others with lighter degrees of intellectual disability. The reason for this was that until the passing of the Mental Deficiency Act of 1913, there was no legal basis for the categories used by facilities for “the mentally retarded,” such as “idiot,” “imbecile,” and so forth. Meanwhile, despite its vast size, the province of Ontario only had the Orillia Asylum for the treatment of the “idiots.” This seemed to have led to the inundation of the facility with disabled individuals who did not meet the formal entry requirements of an insane asylum.

Those residing at the Orillia Asylum were diverse in the type and severity of their disability, as well as their age. Based on the recorded age of deceased residents, one can estimate a broad range that stretches from below the age of 15 to above 55 years; thus, the youngest recorded age was 9, while the oldest was 63 years. Hence, although the institution was initially established as a training facility to help improve the living conditions of children or the youth, in reality, it housed people from several age groups.

Required to accept residents of diverse ages as well as the type and severity of their disability, the Orillia Asylum also faced the problem of overcrowding. When it was established in 1876, it housed 140 residents. However, this number continued to grow every year reaching 659 by 1901. Simultaneously, the number of people waiting for admittance also continued to grow, doubling every 5 years. In addition, the number of those waiting had swelled to 465. To help alleviate this overcrowding, the asylum was forced to expand its facilities. However, purchasing new land alone was insufficient to resolve the issue.

Moreover, the financial situation was precarious. Although the asylum accepted more residents than its capacity, the province failed to allocate sufficient budget to meet this increase from the 1894–95 fiscal year onwards. With a view to help mitigate these financial difficulties, the head of the asylum sought to reduce costs by employing the residents on the premises as workers in housekeeping and farming.

In summary, until the end of the 19th century, provincial asylums for the insane, charities, and correctional institutions had become increasingly aware of the lack of appropriate care for residents with intellectual disabilities and the necessity for a specialized approach. Thus, the Orillia Asylum was established to improve the conditions of young people with “mental retardation.” However, this institution soon faced urgent problems, including the unexpected diversity of the residents, overcrowding, and financial difficulties.

(Ryutsu Keizai University)

The Annual Review of Canadian Studies
Le revue annuelle d'études canadiennes
KANADA KENKYU NENPO

2020

No. 40

Articles

- Okinawan Migration Processes in the Canadian Prairies
in the Early 20th Century..... Hironao Hanaki
The Role and Reality of the Orillia Asylum for Idiots
in the Late 19th Century Ontario Yuri Geshi

Book Reviews

- Akira Tabayashi, ed., *Kanada-ni-okeru Toshi—Noson Kyosei Sisutemu (Urban-rural Symbiotic Systems in Canada: The commodification of rural space and regional promotion)* (Agriculture and Forestry Statistics Publishing Inc.,2020)
.....Naoharu Fujita
Ruth Abbey, *Charles Taylor (Philosophy Now)* (London: Acumen, 2000)
trans. by Yoshiko Umekawa (The University of Nagoya Press, 2019)
..... Takashi Niwa
Mizuho Hasegawa, *Senju-Shosu-Minzoku no Gengo-hoji to Kyoiku (Language Retention and Education of Indigenous and Minority Peoples)*
(Akashi Shoten, 2020)Nobuhiro Kishigami
Masumi Izumi, *Nikkei Kanada-jin no Ido to Undo — Sirare-zaru Nihonjin no Ekkyo-seikatsu-shi (Japanese Canadian Movement)* (Takanashi Shobou, 2020)
..... Yuki Shimomura
Takamichi Mito, Taro Oishi, and Emi Ooka eds., *Sogo Kenkyu Kanada (Understanding Canada: An Interdisciplinary Approach)*
(Kwansei Gakuin University Press, 2020)..... Toshihiro Tanaka

Recent Publications on Canadian Studies in Japan

The Japanese Association for Canadian Studies
L'Association japonaise d'études canadiennes